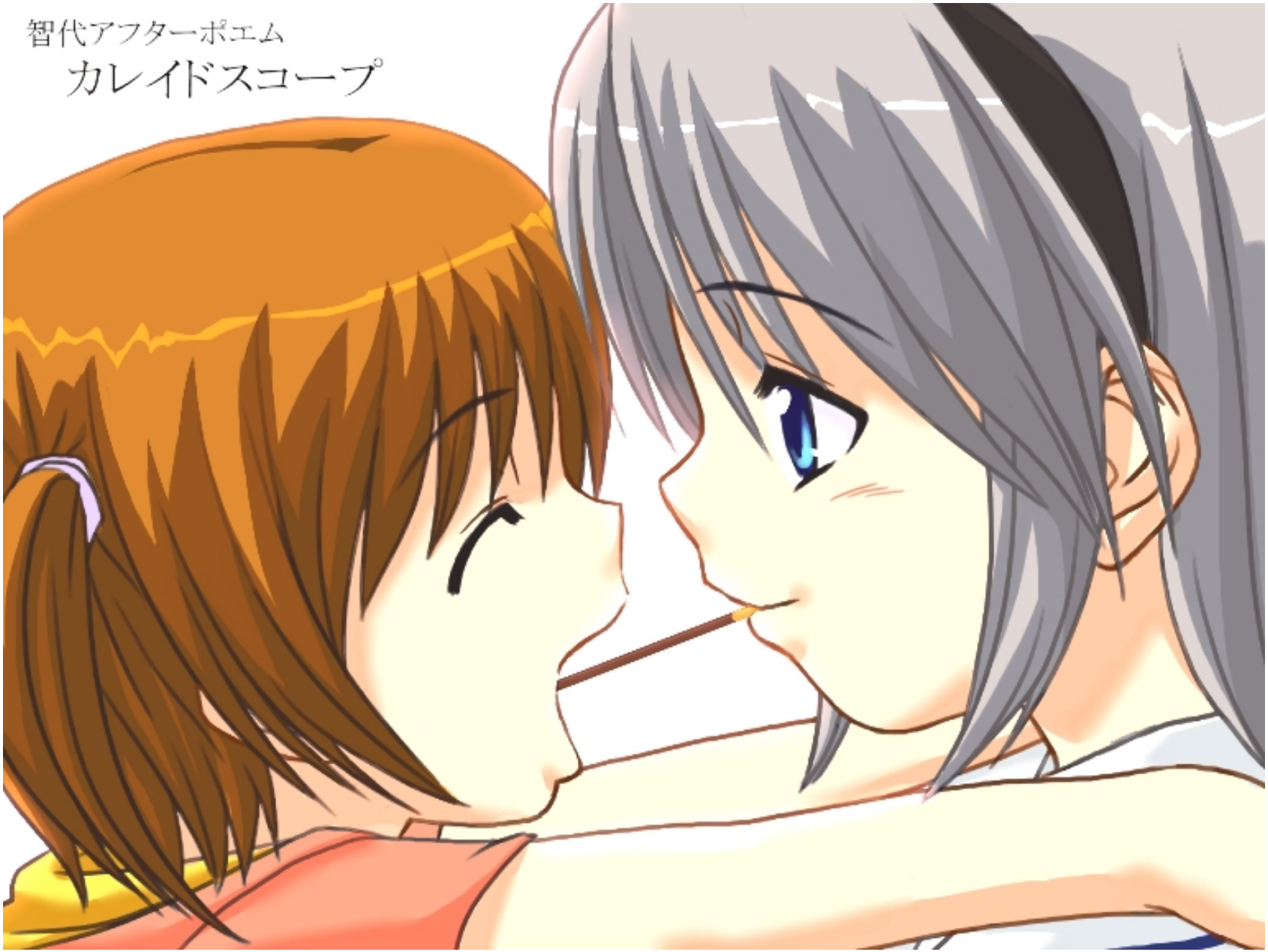
智代アフターポエム

カレイドスコープ



カレイドスコープ

一

今年の夏は、楽しさと驚きと愛おしさで満たされていた。もしあの日々の一片を切り出して眺めることができるのであれば、それはきっと穏やかで静かなものなどではなく、妹の元気溢れる笑顔と弾けるような笑い声という輝きで満ちているに違いない――。そう表現したくなるくらいに私たちの時間は純粋で素敵なものだった。私と妹に向かって放たれていた幸せな日々は、あの夏の晴れ空のように澄み渡っていた――。目を閉じて振り返えれば、そうだったと信じたくなるくらいに、鮮やかで綺麗な出会いの季節だったのだ。

煌めくような新しい出会いは、私たちを大いに喜ばせた。妹への胸いっぱいの愛情は、私にゆっくりと育む時間を与えないかのように急速に拡大し、妹と頬を摺り合わせることを惜しませなかった。妹は私をママと呼んで現実の切なさからほんの少しだけ目を逸らしてはいたものの、たくさんの愛情を私に求めて来てくれた。そして、それが満たされると、とても喜んで私の頬にちゅーをしてくれた。

私たちが作り出したそんな夏は、何かに喩えるとするならば、それはきっと、見る度に形を変えてはキラキラと輝きを放って綺麗な世界を作り上げるカレイドスコープだと思う。何故ならば、無限の変化を遂げながら二度とない美しさを見せつけては消えてゆくそれは、まるで私と妹が僅かの間に交わした愛情のように、すべてを美しく、そして、すべてを儚いものに見せてしまったからだ――。

二

八月の激しい太陽は、その日も容赦がなかった。朋也のアパートの屋根や壁は、遠目に見ても灼けているのがわかった。道のアスファルトなどはそれを真に受けて蜃気楼を作り出し、ゆらゆらとした陽炎を買い物帰りの私に見せつけていた。

汗を拭いながら朋也の部屋に入ると、外と何ら変わらないという事実を示すかのように、古い扇風機が生温い風を撒き散らしていた。そして、そんなクーラーのない部屋で涼をとる為に冷たいミルクを飲んでいた妹は、どうやら私が買い物に行っている僅かな時間を、夏の仕打ちでぐったりとした外の光景を眠そうな顔をしてぼんやりと見て、静かに時を過ごしていたようだった。

私はそんな妹に近づくと、おかえりのちゅーを頬にねだった。私が顔を寄せると、座布団にちょこんと座っていた妹は、軽くげっぷをした後に私の要求を満たしてくれた。僅かなミルクのにおいと、私と同じシャンプーの香りがした。私は暑さで首筋に汗がつうーと垂れていくのを感じながら、そんな妹からの歓待のキスを受けていた。

「――んっ」

しばらくすると、彼女は唇を離し、「おかえり、ママ」と言ってくれた。私はその祝福によって僅かな隙間も許さない程に密集した愛情を感じることができた。それは、暑苦しい中でも彼女への抱擁を

惜しまない程の力を持っていて、何度も汗でやや湿った彼女の髪や頬を撫でる時間を作ってくれた。今までの私にはなかった人を慈しむ心を引き出してくれた彼女への感謝が、それを飽きる程繰り返させてくれた。だから私は、彼女が嬉しそうな顔からやや困った顔になるくらいにまでしつこく抱きしめたり、頭を撫で続けたりした。

勿論、妹は私のそんな行為にだんだんと困惑の表情を浮かべていった。だが、私がごまかすかのように、うだるような夏の中にちりばめられた僅かな清涼さを団扇でかき集めて送ってやれば、妹はそんな涼しい筈もない風であっても、機嫌を直すかのように満足そうな表情を浮かべてじっと受けてくれた。それがわかっていたから、私は夏の情熱に負けないような愛情を彼女に捧げる事ができたのだった。

そうやって無限の愛情を彼女に伝えていくと、その対象を独占したいという気持ちが心の奥底からやって来る。そうなると、私は目を細めながら、すっかりリラックスした妹の表情を永遠にしまっておく方法はないのだろうかと考えてしまう。どうしても、その顔を、その存在を、私の胸の中に収納しておきたいと思ってしまうのだ。

――汚れきった世界に二度と彼女を出したくない――。それが夢のような戯れ言だと一蹴する人間を薙ぎ払ってでも、彼女の為に涼やかな世界を作り出してやりたいと思ってしまう気持ちは、彼女といる限り、なくなることはなかったのだ。

その日も、私がそんな無謬の愛でともに接していると、時計は簡

単にお昼過ぎから三時へと針を進めてしまっていた。
「ママ」
「ああ、もう時間だな」
笑顔の彼女の手を握って台所に連れて行くと、いつものように私たちのおやつの時間が始まる。それを望んでのともの言葉だった。

二人で冷蔵庫を開けて中を覗き込む。そこには、夢や希望が詰まった宝物がある訳でも、私たちの心の痛みをなくしてくれるものがある訳でもない。だが、私たちが密やかに楽しめるものがそこには存在していて、その日もその箱を目当てに、私は妹と顔をくっつけるかのようにして冷蔵庫を眺めていた。
「これだね」
「ああ、今日も、これだ」
冷気を逃がすことが幸せを追い払ってしまうような気がして、慌てて小さな赤い箱を取り出して妹に渡してドアを閉めた
「はやく、たべよー」
「わかった、わかった」
急かす妹がかわいくてかわいくて仕方なかった。

三

私にとって愛情というものは二種類で、一つは一緒に生きていこうと思うような気持ちで、もう一つは守ってあげたいという気持ちだ。前者を持っている人はこの部屋の主人で、後者はいうまでもなく、私の目の前にいたともという存在だ。他の家族や大切な人たちがどちらに定義されるのかは置いておくとして、私の中では、その定義が幸せである状態の確かな証拠だった。

――夏の熱気で疲れる小さな体を労るためにはどうすれば良いのだろうか。そんな心配から始まったおやつがポッキーだった。

冷蔵庫で冷やしたポッキーがおいしいというのは知っていた。だから、お腹を壊さない程度にならともに食べさせるのは良いかと思い、その日の数日前くらいに、朋也に同意を求めてみた。

夕食の時だっただろうか。すると彼は、ニヤニヤしながら、ともを見て言った。

「ポッキーゲームって知っているか？」

「ポッキーゲーム？」

ともの無邪気な顔が私をより恥ずかしくさせた。思わずお茶碗をガチャッ、と音を立てて置いてしまった。

「朋也っ、お、おまえ、いったい私の妹に何を教えようとしているんだ？」

……とにかく、鷹文や河南子がいなくて良かったと思った。

「ポッキーゲーム」

何を根拠にしているのかは不明だが、朋也はそういうと、ともを抱きしめてこちらを見た。ともはあまりない事態に軽く驚きながらも、あの無邪気な笑顔でパパに抱きついていた。

私と朋也がポッキーゲームをしたことは何度か、……いや、何度もあった。朋也は、「これは愛情表現だ」と主張していた。私には単なる変態行為にしか思えなかったが、彼は自信をもってそれを私に要求していた。私はそれがどんな場所で行われているものなのかを何となく知っていたが、そういう場所に行ったことはないだろう彼が、一体どこからそんなことを覚えてきたのか以前は本気で疑問になったものだ。――答えは今でも、謎のままだが。

そんなことを妹に教えるのは絶対におかしい。私は強く反対したのだが、朋也は既にともとしてしまっているところだった。だから私は、哀しさと嫉妬で、思わず俯いてしまうのだった。

結局、その時の二人を見て、私はその「おやつ」をやめようと思ったのだが、ともにはすこぶる好評で、その日も……。

「ママ、ぽっきーげーむ！」

愛情が私たちを、いや、正確には私を狂わせて、その日に至ると、それはすっかりおやつの定番行為となってしまっていた……。

「はやくー」

赤い小箱を手にして、私にその行為をねだる妹。

私は、複雑な気持ちになりながらも、それを是として、その日も妹とじゃれ合ってしまうのだった。

四

――絶対、朋也が悪い。こんなことを私に覚え込ませ、それに飽きたらず、大事な妹にまで教えてしまう朋也はきっと変態だ。あの恥ずかしい気持ちを彼氏に唇ごと掴まれてしまう感覚は、私を変な気持ちにさせる。だからきっと、これはすべて朋也が悪いのだ。

と思いながらも、私はいつも通り（？）妹を正面に座らせていた。妹は正座して目を輝かせていた。ポッキーの小箱と中身を仕切っているビニールは既に開封され、私以外の準備は既に完了していた。

「ママ、きょうは、ママがまってるばんだよ」

軽い目眩がした。幼い子供が私の唇を――おやつのポッキーが楽しみだとはいえ――ねだっているのだ。愛情以外の何ものでもない純粋な感情が私の身体全体を包み込んだ。朋也へのそれとは違うゾクゾクとした感覚が波打つように体内を走った。

「ああ、わかっているぞ」

ともが小箱を渡してきたので受け取ると、早速、一本を取り出してみた。

「ちゅーう、ママ、ちゅーさせて～」

何人も鼻血が出ておかしくないシチュエーション。無垢な表情から放たれる隠微な言葉。だんだんと感覚がおかしい方向に持って行かれるのを感じた。

「さ、さぁ、始めようか」

蒸し暑い部屋の中にいる筈なのに、妹との対面はどこか涼やかであった。

「うんっ」

期待と興奮に潤んだ瞳を向けるとも。――愛おしい。そうとしか言いようのない感情で私は満たされていた。

儀式は神聖でありながらどこか淫靡めいていて、姉妹でいちゃついているという感覚が、微量の興奮を与えていた。私はポッキーのビスケットの部分を口に含み、歯を立ててそれを妹に突き出すようにした。――ほら、これでいいか？　目で準備の完全性を訴えると、ともは黙って頷き、顔を寄せてきた。そしてポッキーの先端にあと数センチのところで一旦止まると、手を私の肩にのせてきた。それはまるで愛情を捧げる相手にキスを迫るような仕草。年端も行かぬ子がそれを意識している訳ではないだろうが、私にとってその既知の感覚は、自分の彼氏にされるような嬉しさと無邪気な愛情を一身に受けている恍惚との二者が微妙なバランスで成り立っていることを自覚させ、身体の最深部に隠しようのない興奮を覚えさせるに十分な快楽を与えていた。

やがて、ともが最初の一口に着手すると、わたしは黙って目を閉じた。あくまでもともから来て欲しい。そんな気持ちで黙ってともがカリカリと食べ進んでいく音を聞きながら、じっと待っていた。

「――すとっぷっ」

何口目かの咀嚼の後、ともはそう言うと、すっと口をポッキーか

ら離した。

「！」

私はそれに少しだけ驚いて、目を閉じた。

「ママ、まだだよー。ちゅーはまだだからねー」

無垢な行為の中に潜むほんの微かな嗜虐的な何かが、幼い魂を掠めたようで、その日は、それまでのポッキーゲームの中で、初めて「おあずけ」という行為をしてきた。

私は僅かに眉を顰めた。――大人をからかうんじゃない――。一方的な規律と秩序を求めてともに視線を送った。しかし、妹の笑顔は一片も失われることなく、小悪魔的なまでにかわいい眼差しを私に向けていた。

「ママ、ちゅーしてほしい？」

――コクン。情けないが、そう返事しないといけないような気がしたし、何よりも私自身が望んでいた。

「じゃ、ちゅーするよー」

半分まで食べられたポッキーも、二度目の愛撫をその先にある私の唇と同じように望んでいるような気がした。勝手極まりない解釈だが、私はそう信じて疑わなかった。

「――んっ」

再び目を閉じると、カリカリという音が高速になり、やがて――

「ん～」

帰着すべき場所へと到達して、ちゅーは完遂された。

五

冷静になれば、とてもばかばかしい遊びだと思うだろう。だがこの時はその冷静さを取り戻したくなかったら、この行為は至って正常で、正統的なスキンシップだった。私も妹も、そんな儀式を執り行うことに何ら疑問を感じてはいなかった。

ポッキーゲームの回数を重ねていくうちに、妹は自分の気持ち良さを追求してくるようになった。私の上唇を吸うのが楽しいと感じればそればかりをしてみたり、私が僅かに顔をしかめるのを楽しいと思えば食べたポッキーを押しつけてきたりした。時折、チョコレートのたくさんついた唇で私の頬にキスをして跡をつけては喜んでいた。妹の好奇心といたずら心がない交ぜになった感情は、私の目の前に剥き出しになっていて、ちゅーや愛撫という形で示され続けていた。

「ママ、もういっぽんいくー？」

「おいっす！　て、ちょ、ちょっと、そろそろこのへんで休憩しないか？」

彼女は元気な笑顔で私の提案を拒み、私の唇にポッキーをセットした。

「ママぁー」

――と、朋也にはとても見せられないぞ……。

姉妹の愛情という一枚の絵画が、度を超えた痴態という名の剥落

をおこしていた。だが、私はすっかりとものペースになってしまったことに苦笑しながらも、妹との僅かな時間を惜しんでいたから、やめようとはしなかった。

――僅かな時間？

自分がそれを正当化している本当の理由を心の中で繰り返してみると、その言葉がとても重いことを知った。それは自分でわかっていても、目を逸らしたい辛さだったから、尚更重かった。その時初めて感じたと思いたい気持ちは、やるせなさを私の心に与えていた。

「ぽっきー、まだあるんだよー」

箱にあるポッキーを示してニッコリするとも。――こんなこと、今までやってきたことじゃないか――。特別な感情を習慣という言葉に封じ込めようとする私。ともはそんな私に、これからもずっと変わらないことを信じているような、あるいは信じたいような瞳を向けてきた。――さあ、はやく、はやく、ママ――。そんな表情が私の胸をゆるやかに締め上げていた。

やがて、彼女なりに私の戸惑いを察知したのか、僅かに眉を下げて聞いてきた。

「こんどは、とものばんにしようか？」

そう言うと、自分からポッキーを口に含んだ。その間違っている気の遣い方も、そうでありながら、しっかりと自分の口元にポッキーのチョコレートのついている方を咥えているかわいらしさも、私にはすべてがせつなくなれるものだった。

「そうか、じゃあ、今度はともが目を閉じてくれ」

「うんっ」

んーという表情をしてしっかりと目を閉じるとも。

私は期待と興奮と不安に三等分されたそんな妹の顔をしばらく眺めていた。そして、ある自分の不安をその先に投影していた。――ともは母親のもとに帰さないといけない――。その常識的な判断を拒み続けたい気持ちを消せない自分を責めながらも、私はそうしたくない意志を捨てようとはしなかった。

「いくぞ、とも」

コクリと小さく頷く妹。私はビスケット部分の先端まで唇を持っていった。そして、彼女の小さすぎる肩に手をやった。

――朋也。すまない。私は、私はどうしても、とものことを――。

気がついたら、私はポッキーを急いで食べていて、キスをしていて、そして、――ともを押し倒していた。

六

――何を、しているのだろう。

手の届かない場所へ連れて行かれようとしているともを捕まえたい。向日葵のような鮮やかな笑顔を縛り付けておきたい。そして、何よりも自分の中にある悲しみを救って欲しい。私は幼子の舌を奪い続けていた。チョコレートとビスケットの味。ざらつくお菓子の感覚を除けながら、私は彼女の舌に舌を絡めて大人のキスをせがみ続けていた。互いに目を大きく開いていた。彼女は驚きと戸惑いに、私は懇願と悲哀に満ちた瞳を相手に見せつけていた。

小さな手を握り、もう一方の手で彼女を逃がさないよう押さえつけていた。何度も未熟な唇を吸い上げ、唇を擦りつけていると、彼女もさすがに普通ではないことに気づいて離れようとした。

「――ママ？」

――どうしたの？　そんな二の句は継がせない。――今彼女と離れてしまったらもう抱き寄せることはできなくなる――。勝手な恐怖が私の理性を無秩序にした。首筋に舌を這わせると、チョコレートの味と、おかえりのちゅーのときに感じたシャンプーの香りと、ミルクの甘いにおいがした。

「ちょ、ちょっと、ママ、どうしたの？」

ともは私からなんとか逃れると、目をパチクリさせていた。

「――なんでもない。うん、なんでもないんだ」

慌てて笑顔を作り、ともを起こしてから、頬についたチョコレートを拭いてやった。ともはどうしていいのかわからず、「うん」とあいまいな言葉を出してから、じっとしていた。

「すまない、少し、悪ふざけしすぎた」

「……ううん」

顔や唇についたものも丁寧に拭いてやる。私よりも白く柔らかい肌を汚していた茶褐色は少しずつなくなっていったが、よく見ると彼女の栗色がかった髪の毛にもそれはついていた。

私がともの髪に触れようとすると――

「ママ、これ……」

小さな筒状のものを私に見せてきた。それは――私がともおもちゃ代わりにと、家から持ってきた万華鏡だった。

「とっても、きれいだよ？」

この状況をどうしていいかわからない妹は、そう言って私にそれを差し出した。それを見れば何かが良くなることを純粋に期待している顔をしてじっと私を見ていた。

「ああ、そうだな。とても綺麗だな。これはな、私が――そうだ、ちょうど私がともくらいの時に買ってもらったものなんだぞ。縁日に母さんから――」

あまりにも無神経すぎた。最後の呼称を平気で言える自分に酷くがっかりした。

だが、ともはそのことには反応せずに、万華鏡を見ていた。手で少しずつ筒を回しながら、変化する世界を見て「きれいだねー。ふ

しぎだねー」と繰り返していた。私は自分の愚かさを償うかのように、妹の一言一言に「そうだな、そうだろう」と返事をした。

「ふしぎだね、なんでこんなふうにかわるんだろー」

「うーん。実は私も仕組みをよくわかってはいないんだ」

「へー、ママでもしらないことってあるんだね」

「ああ、もちろんだ。私が知らないことことなんて、たくさん、たくさんあるんだぞ」

「へー」

意識の半分と視界の全てを円筒形の鏡に向けながら、ともは私に返事をした。私はそんなことに夢中になれる幼さが羨ましかった。だが、髪についたチョコレートを取ってやろうとして、それは思い違いだと知った。――彼女の髪止めを外してストレートにすると、幼いともの顔がぐっと大人びて見えるようになったのだ。それは私よりも大人に見えるくらいに美しく、そして儚いものだった。

「とてもきれいだぞ」

「え？」

「――なんでもない。なんでもないぞ」

優しく頭を撫でてあげた。それから、妹の表情に自分でも説明のできない恐れを抱きながら、私はともの為に、自分の為に願いを籠めて祈ってみた。――幸せになろうな――。そうやって未来の彼女への伝言を、髪をおろしたその日の彼女に託してみた。それがどういう意味なのか、何を求めているのかはわからなかったが、そうしたくて、そうしないといけないような気がして、私は祈り、願った。

七

ともは私の想いを知ってか知らぬか、無限の世界をずっと見続けていた。ポッキーゲームのことから現実を逸らそうという意図なのだろうが、それは純粋で一途な姿に見えた。

そんな風景を眺めていると、鏡に反射し合った美しい映像を見ているような気持ちになった。一片を同じように展開した光景は、考え方を変えれば一片以外はすべて偽物だということに気づかされる。それは、現実には僅かな一部分だけですべてを綺麗に見せようとする無理なのだと我に返り悟ることが出来る。夏のかけらを取り出して幸せだと思いこみたい自分を嘲笑うかのような万華鏡。ともが面白そうに見れば見る程、私の胸は痛くなっていった。

――なあ、とも。どんなに綺麗な世界を二人で眺めても、現実に戻れば、ともを、とものお母さんのもとに帰してあげないといけないんだな。私がママでは、いけないんだな――。

やがて、ともは万華鏡から目を離すと、私をじっと見た。――どう、ママ？　そんな問いかけをされているような気がした。その想いに、私の視界はついに歪んでしまった。

「いいこ、いいこ」

私のそんな情けない姿を前にして、ともは私の頭をそっと撫でて

くれた。そして、何度も何度も「いいこ、いいこ」と繰り返して私を慰めてくれた。その対象が逆であることをわかっていながら、私は何もできずに、ただ黙って頬を濡らしていた。

「いいこ、いいこ」

そして、何十度目かの「いいこ」で、私の大人としての理性は完全に崩壊した。私はともを力強く抱きしめ――いいや、ともに縋ってしまっていた。

「ともぉ……」

「ママ、いいこ、いいこ」

「うん。ともも、とっても、とってもいいこだぞ」

私には妹の無知な優しさがとても愛おしいかった。そして、自分の小賢しい優しさが心底憎らしかった。もうすぐやって来る別れの存在をまったく知らない妹と、それを諦めという形で半ば予感している私。どんな夏にも秋が来ることで終わりがあるように、姉妹という轍を遮る終端の標識が、もうすぐ私たち二人の前に現れることを私はわかっていた。だが私は、この大気が涼しさで覆われる前に、蝉の命が果てる前に、妹と別れてしまうのだと知っていながらも、彼女にそれを教えることなく、抱きしめ続けていた。――ずっと一緒にいよう。私と、この私と、ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、一緒にいよう――。ともの髪の艶が、まるで天使ような綺麗な光の輪を作っていた。私はそんな細くて儚い妹の髪を撫でてから、力を篭めてもう一度抱きしめた。彼女の柔らかい頬が私の濡れた頬に触れると、私はついに声を出して泣いてしまった。

「ママ、ないているの？」
「……いいや、泣いてなんかいないぞ」
妹の柔らかい手が私の頬に置かれた。そして幼すぎる指が私の涙を拭いていた。
「なかないで」
「――泣いてなんかいないぞ」
「なかないで」
「――」
人を愛するということが心の痛みを伴うことを知っていても、私には、胸の奥底にある妹への愛情を捨てることができなかった。それどころか、哀しくなりながらも抱え込むように大事にしてしまうことを、誇りにすら思っていた。
朋也とならば、胸の中で抱きしめられさえすれば、やがて癒されていくことを知っていた。だからその痛みを恐れる必要がないことを理解していた。だが、ともを想う心の痛みは、どうやったら癒されるのか、どうやったら救われるのか、私には答えがなかった。
彼女に至っては、私や朋也、鷹文や河南子へのそれを、いったいどう胸にしまっておけばいいのか、あるいはしまう必要があるのかなど、まったくわからなかっただろう。だからその時の私たちには、互いの愛情は永遠に続くものだと、愚かしいまでに信じることだけしか辿るべき道がなかった。
しばらくの間、私は泣いていた。彼女もそんな私を見てついに泣

き出してしまった。だがもう、互いに慰めることはしなかった。
そのかわり私たちは、精一杯泣いたら、精一杯の笑顔をしてポッキーゲームを続けようと約束した。――言葉ではなく、態度でもなく、気持ちでもなく、互いの絆で約束をしたのだ。そう、互いが信じている笑顔に向かって私たちは約束したのだ。
「さあ、とも。もう一度、ポッキーゲームをしよう」
「うん！」
私はともの口にポッキーのチョコレートの方を入れた。妹は黙ってそれを受け入れると私を見つめた。――しばらく、目を開けないでくれ――。私が静かにそう呟くと、妹はコクリと頷き、そして目を閉じてくれた。
私は妹に悟られぬよう、静かに涙を拭いてから、彼女の唇に挟まれたポッキーの先に唇を寄せた。そして、やがて来る別れに負けないように、ポッキーを小さく齧りながら甘くてしょっぱい味をなぞっていった。――幸せになろうな。そう願い続けて、ちゅーをしようとした――。

翌日、私たちはともの母親に会いに、あの村へと出かけた。そして、ともは一緒に過ごすべき本当の人のもとへと帰り、私たちは彼女と出会う前の日常へと帰った。だから、その日のポッキーゲームが、私と妹が二人きりで過ごした、美しくも儚い最後の季節（カレイドスコープ）だった。

（了）

みのりふさんにお祝い☆

やっぱり、智代アフターはクソだぜ！（肯定派に喧嘩売ってみる）

さあ、軽く二ヶ月近くブッチしておきながら、悪びれることなく、平然と笑顔で言いますよー。

この度は、

サイト開設三周年（二月十八日）、

まことにおめでとうございます！

さて、以前は拙サイトに寄稿して頂きましてありがとうございました。ちなみに寄稿頂いたハッスル軍団の中で読者数ＮＯ１は、みのりんのエロＳＳでした。読者はわかっているわけですね。そうそうあの冒頭のセリフは東鳩２だということをようやく知りましたよ。

サイトを始められて三年ということで、その長い時間たるや私には想像できません。こちとら放り投げたり、畳んだり、意味もなく再開したりするような駄目人間ですので、継続して積み上げていくみのりんのベテランっぷりには頭が下がる想いです。この場を借りて敬意を表させて頂きます。そしてこの勢いでぶっちゃけると、私

はプロレスネタになるとちょっとテンションがあがるみのりんが大好きです。あと、ちゃんと日記を書け。

拙作ですが、みのりんへのお祝いの筈なのに、いつもの通りの鬱ポエムです。自己満足と**ダーマエ氏ね**の精神で、どろどろだらだらと書くのって最高ですね。鍵っ子とか読者なんて知るかっての。

そんな訳で、誰もこんな酷いことしないから、私は今日もオンリーワンでいられてハッピーなわけですよ。ホントニ。ポエマーって名乗っていると何でも許されるからいいよね！（↑そうなのか？）

ちなみに、今回は文章の酷さを隠すために、ＲＹＵＫＩさんにお願いして絵をつけて貰いました。http://www5e.biglobe.ne.jp/~opt/ 文章がアレでも、絵で思わず（騙されて）買ってしまうラノベみたいな商法をある日突然思いついたんですよ（笑）　ということでＲＹＵＫＩさんありがとぅ。ちなみに私は彼に「ちょっ早で仕上げてね。つか、あと一週間」って言いました。彼はちゃんと間に合わせてくれたのですが、私はそれから更に**一ヶ月半くらいブッチして**しまいました。うっさい！　人でなしとか言うな！（キレ）

……ものすごく脱線しまくりましたが、これからも頑張って良作を生み出し続けてください。最後にもう一度。みのりふさん、サイト開設三周年、おめでとうございました！（過去形）

よしお